

担任に対する信頼感は生徒の学校適応感に影響するのか —マルチレベル分析による学級雰囲気への媒介効果の検討—

41825009 西 裕太郎

1. 研究の背景

児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査（文部科学省 2018）によると、中学校の学校での暴力行為の件数 28,702 件、不登校生徒数 119,687 人、いじめ認知件数は 80,424 件と、いずれも極めて多い状況にあるということが示されている。これらの状況については、生徒指導上の諸問題のある生徒の中には、学級や学校といった環境に上手く適応できていない感覚を抱えている生徒が多いと考えられている。この感覚について、先行研究では、それらを学校適応感という概念を用いて検討している。大久保（2005）は、学校適応感を「学校環境の中でうまく生活しているという生徒の個人的かつ主観的な感覚」として定義しており、本研究も同様に捉えることとする。

この学校適応感とは、生徒の個人的かつ主観的な感覚として扱われているものの、他者から受ける影響は大きい。たとえば、生徒—教師という関係に着目すると、教師が生徒の学校適応感に与える様々な影響が明らかにされている。たとえば、林田・黒川・喜田（2018）は、学校適応感に対して、教師関係への満足感が正の影響を及ぼしていることを明らかにした。他にも、越・西條（2004）は、生徒が教師のはたらきかけを親和的・受容的だと認知しているほど、学校適応感が高いことを指摘している。

一方で、教師のはたらきかけの影響について、小野・庄司（2015）は、部活動において先輩後輩関係における規律、先輩後輩関係のコミュニケーションに対して、顧問のかかわりが影響していないと述べている。これは、顧問のかかわりよりも、部員間の雰囲気の良いことや部員の主体的なかかわりなどの集団という要因が先輩後輩関係に強く影響したのだと考えられている。この研究からは、教師の生徒に対するはたらきかけよりも、生徒が所属する集団の雰囲気が生徒たちの関係に影響を与えていると考えられる。また、岡安・島田・丹羽・森・矢富（1992）は、中学生の学校ストレスとストレス反応との関連性について検討し、学校ストレスは生徒のストレス反応と正の相関があることを明らかにした。中でも、“友人関係” ストレスと“抑うつ・不安感情”の間、および“学業” ストレスと“無力的認知・思考”の間

の相関がかなり高いことがわかった。一方で、“教師関係” ストレスは“友人関係”・“学業” ストレスと比べると、ストレス反応とそれほど強い相関は見られなかった。

このように、教師のはたらきかけの影響よりも所属集団や友人などから受ける影響の方が強いと指摘している研究も多数存在している。しかしながら、教師のはたらきかけを生徒個人に対する影響としてみるだけでなく、生徒集団に対しての影響というものも考慮すると、教師のはたらきかけがいかに重要かわかる。生徒集団に対する影響という点において、三島・宇野（2004）は、教師が児童に対して、受容的で親近感を感じさせられるような行動・態度を示しているほど、意欲的で楽しい学級雰囲気になるなど、教師のはたらきかけが学級に与える影響について明らかにしている。また、上羽（1986）は、教師のはたらきかけと学級雰囲気について、教師が全体として承認・賞賛を多く与えている学級ほど共同作業に対する協力度、学級活動への関与度、規則の順守度、学級との一体感が高いことを明らかにした。また、そのはたらきかけ頻度の児童による差異が大きい場合には逆に児童の学級への帰属意識を低めてしまうことになり、学級の雰囲気を好ましくないものにする可能性も示している。これに加え、藤原・成田（2014）は、学校享受感には学級の雰囲気が最も強く有意に影響し、友達との友好度と授業意欲は学級の雰囲気を媒介して学校享受感に影響していることがわかった。したがって、学級担任のはたらきかけが学級集団に影響を与え、その雰囲気や居心地感が生徒の学校適応感に影響を及ぼしている可能性も考えられる。

2. 研究の目的

しかし、これまでの研究では、教師のはたらきかけが生徒の学校適応感に直接的に与える影響でとどまっておき、教師のはたらきかけがその学級集団に影響を及ぼし、その集団の雰囲気や居心地感が生徒の学校適応感に影響しているということまでは検討されていない。そこで、本研究では、学級の雰囲気を担任のはたらきかけと学校適応感をつなぐ媒介変数として設定して検討を行う。なお、担任のはたらきかけについて、生徒が教師のはたらきかけを親和

的・受容的だと認知しているほど、学校適応感が高いことを指摘されていること（越・西條 2004）を鑑み、本研究では、担任の受容的なはたらきかけを中心に検討していく。

また、学校適応感など、生徒が抱く感覚を検討する際、生徒はその学校や学級固有の影響を受けていることを考慮しなければならない。例えば、雰囲気の良い学級に所属する生徒と雰囲気が悪い学級に所属する生徒では、学校適応感の得点と同じであったとしても、その値の持つ意味が異なる。つまり、個人と集団の二つの効果が混在し、得られた効果を正しく解釈できなくなるという問題が考えられる。石森・小杉・清水・藤澤・渡邊・武藤（2017）は、夫婦関係において、彼らのデータ間には高い集団内類似性の存在は想定されるとしており、階層性のあるデータに適したマルチ分析の必要性を確認して分析を進めている。同様に、本研究でも、学級という単位を無視してデータを解析することはできないため、学級集団としてのまとまりの分析を行う必要がある。なお、集団内類似性を統計的に評価するための指標として、全体の分散に占める集団レベルの分散の大きさを表す級内相関係数を使用する。分析方法について、Zhang et al. (2009)のマルチレベル媒介分析（1-1-1モデル）を適用した。

よって、本研究では、個人レベルと学級レベルで、①担任の受容的なはたらきかけが直接的に生徒の学校適応感に影響するのか、②担任の受容的なはたらきかけがその学級集団に影響を及ぼし、その集団の雰囲気や居心地感が生徒の学校適応感に影響しているかを明らかにしていく。

3. 研究の方法

(1) 調査対象

20XX年の9月から10月にかけて、中部地方の公立中学校の在籍生徒を対象に質問紙調査を実施した。公立中学校2381名（男子1218名、女子1163名）から回答を得た。なお、学級数は、82である。

(2) 実施内容

①学級風土尺度の項目

生徒が感じている学級雰囲気について考察するにあたり、伊藤・宇佐美（2017）が作成した学級風土尺度の項目内容が適当だと判断した。学級風土とは、個々の学級が持つ独自の性格や雰囲気のことである（伊藤・松井 1996）。よって、この尺度の「生徒間の親しさ」、「規律正しさ」の2因子を用い、全14項目について、5件法で回答を求めた。

②教師に対する信頼感尺度の項目

中井・庄司（2008）が検討した教師に対する信頼感尺度の内、「安心感」因子を用いた。この尺度は、教師の受容的なはたらきかけに関する項目内容が多く、尺度としてこれら全11項目について、4件法で回答を求めた。

③学校適応感尺度の項目

大久保（2005）によって作成された、青年用適応感尺度のうち、「居心地の良さの感覚」、「被信頼・受容感」、「劣等感の無さ」の3因子を用いた。これら全23項目について、5件法で回答を求めた。

4. 結果と考察

1) 級内相関

学級を単位とした（以下学級レベル）級内相関係数を算出したところ最も高いもので規律の正しさの.21であった。結果（Table1）から、教師に対する信頼感と学級雰囲気の級内相関係数が高かったため、これらはどの学級内でも共有される感覚であることがわかった。さらに、その感覚から生徒は影響を受けることが考えられる。たとえば、この学級は仲がいいと感じる生徒が多い学級では、その学級内のほとんどの生徒が同じように感じているということである。これは、学級雰囲気または学級風土とは、学級構成員の相互作用によって学級内に醸成される一定の気分であるという小川・水野・倉盛（1979）の知見からも、学級雰囲気は学級内の生徒によって醸成され、さらにその雰囲気は学級内で共有されるものであると考えられる。また、学級雰囲気が学級内で共有されているということは、気になる生徒への指導・援助において、学級雰囲気からアセスメントが可能であることもうかがえる。

Table1 学級内での各因子の級内相関係数と信頼区間

| | 級内相関 | 95%下限 | 95%上限 | p値 |
|---------|------|-------|-------|-----|
| 生徒間の親しさ | .11 | .08 | .16 | .00 |
| 規律の正しさ | .21 | .16 | .27 | .00 |
| 安心感 | .12 | .08 | .17 | .00 |
| 居心地の良さ | .04 | .02 | .07 | .00 |
| 被信頼・受容感 | .03 | .01 | .06 | .00 |
| 劣等感の無さ | .03 | .02 | .06 | .00 |

2) 居心地の良さに対する影響

マルチレベル媒介分析の結果 (Figure1) から、個人レベルでは、安心感は、直接的に生徒の居心地の良さに影響を与えること、安心感が学級の雰囲気を生徒間の親しいものにする事で、生徒の居心地の良さに影響を及ぼすことが示された。さらに、学級レベルでも、上記の個人レベルの結果を支持するものとなった。よって、担任のはたらきかけを受容的だと感じる学級ほど、居心地の良さを感じやすくなる。そして、担任のはたらきかけを受容的だと感じる学級ほど、学級雰囲気が好ましくなり、居心地の良さも感じやすくなることがわかった。このことから、生徒個人と学級全体が居心地の良さを感じるためには、担任の受容的なはたらきかけが重要だということが明らかになった。また、中学生の学校適応感に対する友人関係の影響が強い (大久保 2005) ことから、担任の受容的なはたらきかけが生徒間の親しい雰囲気を促している点で、より担任の受容的なはたらきかけが重要だということが示された。

3) 被信頼・受容感に対する影響

個人レベルでは、安心感は、直接的に被信頼・受容感に影響を与えることが認められた。また、安心感が学級雰囲気に影響を与え、それが被信頼・受容感にも影響を与えることが認められた。さらに、学級レベルでも、安心感が直接的に被信頼・受容感に影響していることと、生徒間の親しさの媒介効果が認められた (Figure2)。これらのことから、担任が受容的であれば、直接的に学級の被信頼感・受容感を高める、さらに生徒間の親しい学級雰囲気へ促すことによって、間接的に学級の被信頼感・受容感を高めることができるといえる。つまり、担任の受容的なはたらきかけは、好ましい生徒-教師関係を築き、親しい友人関係を促すことで、生徒に周りから信頼されている、受け入れられていると感じさせていると考えられる。

4) 劣等感の無さに対する影響

結果 (Figure3) から、個人レベルでは、安心感が生徒の劣等感の無さに影響を与えていることが認められた。しかし、学級レベルでは、劣等感の無さに対する安心感の影響は確認されなかった。劣等感について、水間 (2000) は、他者を通じて自己、理想自己を強く意識することで生じる感情だと述べている。つまり、劣等感とは、学校環境の要因や生徒の素因、成育歴等の要因など、様々な要因から成り立っているのではないかと考えられる。そのため、個人レベルでは、担任の受容的なはたらきかけが劣等

感の無さに影響をあたえるという結果が表れ、一方で、学級レベルでは、必ずしも劣等感の無さへ影響を与えるのは担任のはたらきかけだけではないという結果が示されたのだろう。

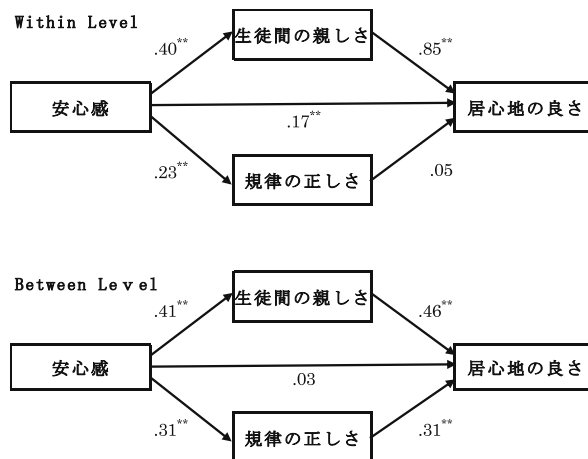


Figure 1 居心地感の良さに対するマルチレベル分析の結果

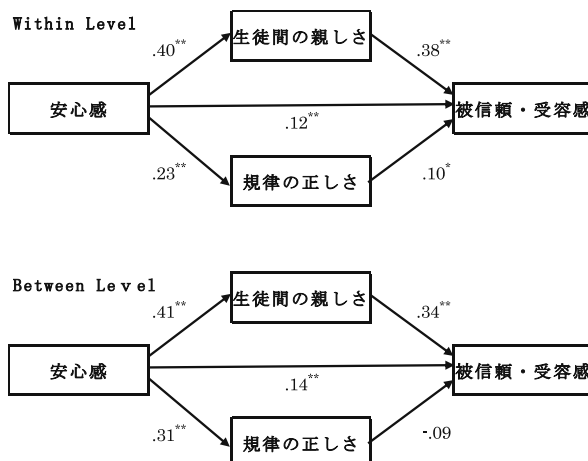


Figure2 被信頼・受容感に対するマルチレベル分析の結果

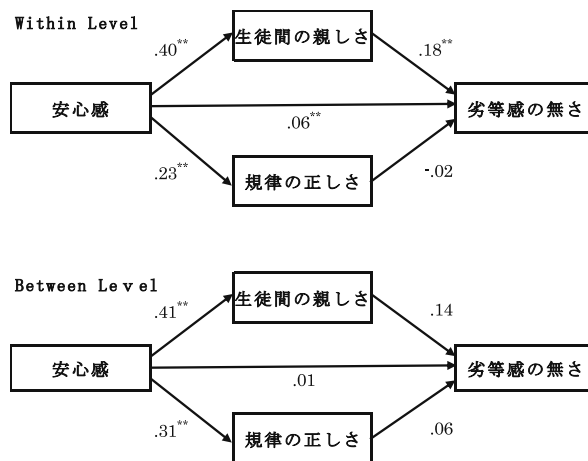


Figure 3 劣等感の無さに対するマルチレベル分析の結果

5. まとめと課題

本研究の目的は、①担任の受容的なはたらきかけが直接的に生徒の学校適応感に影響するのか、②担任の受容的なはたらきかけがその学級集団に影響を及ぼし、その集団の雰囲気や居心地感が生徒の学校適応感に影響しているかを明らかにすることであった。その結果、個人レベルと学級レベルで、担任の受容的なはたらきかけが生徒の学校適応感に影響を与えていることが示された。また、個人レベルと学級レベルで学級雰囲気の学校適応感に対する媒介効果が確認され、担任の受容的なはたらきかけがその集団の生徒間の親しさや規律の正しさに影響を与え、その学級雰囲気が生徒の学校適応感に影響を与えていることが示唆された。

注目すべき点は、82クラスによるマルチレベル媒介分析から、個人レベルと学級レベルで担任に対する信頼感と学校適応感の関連について分析した点と、学級雰囲気の媒介効果を明らかにした点である。従来の研究では、担任に対する信頼感が高い生徒は、学校適応感が高いという個人レベルの結果で留まっていた。しかし、マルチレベル媒介分析によって、担任に対する信頼感が高い学級は、学校適応感が高い学級であるという学級レベルでの結果を示すことができた。そして、担任の信頼感が学級雰囲気を媒介し、学校適応感に影響を与えていることを明らかにしたことで、担任の受容的なはたらきかけが、直接的に学校適応感を高めなかったとしても、学級雰囲気を媒介して、結果的に生徒の学校適応感を高めることがわかった。

学校現場では、問題行動を示す生徒が在籍する学級の担任が、その生徒に対する個別支援に着手し、他の生徒も見なければいけないと思いつながら、彼らの対応に追われているという現状がある。これに対し、関戸・安田(2011)は、問題行動を示す生徒が複数在籍する学級に、学級全体に行動目標とそれに関連した集団随伴性を設定した結果、その生徒の問題行動が改善された事例を述べ、クラスワイドな支援の効果を示している。本研究でも、担任のはたらきかけが学級集団を通して、結果的に生徒個人に影響を及ぼしている点で、学級アプローチの有効性を支持することができる。

しかし、本研究で扱った担任のはたらきかけにおいては、具体的な指導を生徒に尋ねたものではない。そのため、どの場面でどのような指導を行えばいいのかという具体的な指導方法を示すまでには至らなかった。長峰・澤(2009)は、教師の指導行動・態度を分析し、「児童と同

じ気持ちになって考える」や「児童と一緒に仕事をしたり作業をしたりする」、「子どもが発言しやすいように和やかな雰囲気を作る」などを児童への共感的・肯定的態度としている。さらに、担任がそれらの行動を多く示すほど、その学級の児童が認知する「学級の雰囲気」はポジティブであり、「学校や学習への関心・意欲」が高くなることを指摘している。本研究結果を踏まえると、このような指導・支援から生じる信頼感は、直接的または学級を介して、生徒の学校適応感を高めることが示され、今後はこうした研究に基づいた実践が蓄積されていくことが期待される。

【参考文献】

- 藤原正光・成田悠都子(2014)学校の学校生活・学級適応感に関連する要因が学校享受感に及ぼす効果 教育研究所紀要 23,95-104
 林田美咲・黒川光流・喜田裕子(2018)親への愛着および教師・友人関係に対する満足感が学校適応感に及ぼす影響 教育心理学研究 66,127-135
 石盛真徳・小杉孝司・清水裕士・藤沢隆史・渡邊太・武藤杏里(2017)マルチレベル構造方程式モデリングによる夫婦ペアデータのアプローチ：中年期の夫婦関係のあり方が夫婦関係満足度、家族の安定性、および主観的幸福感に及ぼす影響 実験社会心理学研究 56(2),153-164
 伊藤亜矢子・松井仁(1996)学級風土研究の経緯と方法 北海道大学教育学部紀要 72,47-71
 伊藤亜矢子・宇佐美慧(2017)新版中学生学級風土尺度の作成 教育心理学研究 65,91-105
 越良子・西條正人(2004)学年教師集団の雰囲気と教師-生徒関係および生徒の学校適応感の関連 上越教育大学研究紀要 24,1
 三島美砂・宇野宏幸(2004)学級雰囲気に及ぼす教師の影響力 教育心理学研究 52,414-425
 水間玲子(2000)劣等感 青年心理学辞典 福村出版 p213
 文部科学省(2018)児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査 https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/shidou/1267646.htm (最終閲覧日 2019.12.12)
 長峰信治・澤祐紀恵(2009)小学校の担任教師の指導行動・態度と児童の学級適応感の関連について 金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要(1),53-67
 中井大介・庄司一子(2008)中学生の教師に対する信頼感と学校適応感との関連 発達心理学研究 19(1),57-68
 小川一夫・水野ひとみ・倉盛一郎(1979)学級の個性 小川一夫(編)学級経営の心理学 北大路書房 p171-198
 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森俊夫・矢富直美(1992)中学生の学校ストレスの評価とストレス反応との関係 心理学研究 63(5),310-318
 小野雄大・庄司一子(2015)部活動における先輩後輩関係の研究 - 構造、実態に着目して-教育心理学研究 63,438-452
 大久保智生(2005)青年の学校への適応感とその規定因-青年用適応感尺度の作成と学校別の検討 教育心理学研究 53,307-319
 関戸英紀・安田知枝子(2011)通常学級に在籍する5名の授業参加に困難を示す児童に対する支援-クラスワイドな支援から個別支援へ- 特殊教育学研究 49(2),145-156
 上羽潤子(1986)教師の処遇と学級雰囲気との関係 日本教育心理学会総会発表論文集 28,498-499
 山田恭子(2017)教師・保護者・友人のはたらきかけが本来感と自尊感情に及ぼす影響：心理的 well-being の向上を目指した検討 岐阜大学教育学部研究報告.人文科学 66.1.241-250
 Zhang,Z,Zyphur,M.J,&Preacjjer,K.J.(2009)Testing multilevel mediation using hierarchical linear models :Problems and solution. Organizational Research Methods, 12 695-719.